町民文芸

只見短歌会　令和六年十二月詠草

戦争のニュースは悲惨外国の海に眠れる父若かりし　目黒　富子

一晩で積雪なりし里景色降りつぐ雪に思ひをはせし　関谷登美子

プレゼント持ってきてよねサンタさん寝る前パパにつぶやく我が子　立花　奏音

日の長くなりしは冬至のわづか前外の白みて明るく見ゆる　新国由紀子

山白く冬の訪れ迫りくるも衣替へなど間に合わずして　渡部ヨリ子

只見俳句会　十二月定例会

日高俊平太　指導

いにしえの奈良の都や冬木立　信

つらつらと飛鳥の里や冬紅葉　都

初雪に幼児が「うきうき」親子づれ　睦子

雪深深友と交わす一杯のコーヒー　礼

道折れて石垣続く柿紅葉　味代子

鍵忘れ鍵穴にらみ冬の暮　味代子

雪簾越しの山河や年新た　樹希

茅葺きの番所に千の氷柱かな　樹希

炬燵(こたつ)布団替えた模様で長話　一恵

荒畑に残るピーマン今朝の雪　一恵

友の妻を悼む

感謝して一人で逝くや冬日和

無念さをサンタに託し息を切る

冬ぬくし術後の夫と向い居て

クリスマスソングや夫は快方へ